

近代文学研究叢書

第四十六卷

昭和52年11月10日 印刷

昭和52年11月20日 発行

[¥3000]

著者	発行者	印刷者	発行所
昭和女子大学近代文学研究室	東京都世田谷区太子堂一丁目五番五郎	東京都千代田区神田錦町三丁目一四番地 梶原忠幸	東京都世田谷区太子堂一丁目五番五郎 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座東京四一七〇八六七 電話(世)五一三一八番

近代文学研究叢書

第四十六卷

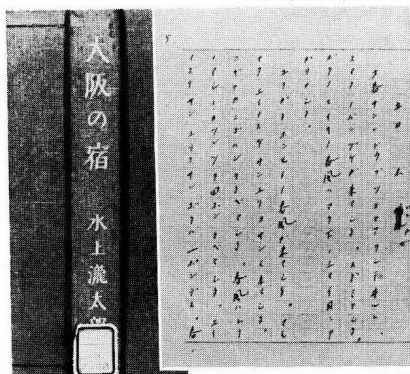
昭和女子大学

近代文学研究室

水上瀧太郎 (1)

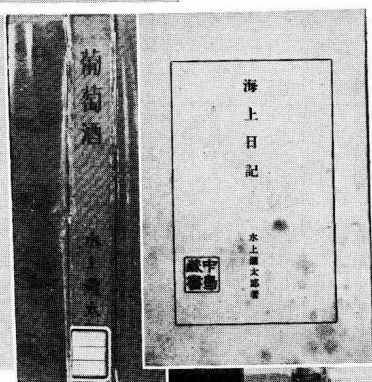
筆跡・八歳の日記より
(阿部俊蔵氏蔵)

肖像

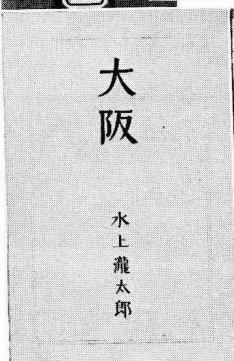


大阪の宿 大正15年9月刊
(昭和女子大学蔵)

海上日記 大正6年12月刊
(昭和女子大学蔵)



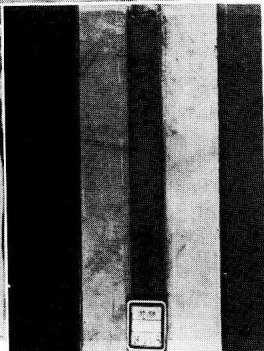
葡萄酒 大正11年10月刊
大阪 大正12年4月刊
(昭和女子大学蔵)



月光集
昭和4年11月刊
(昭和女子大学蔵)



大空の下
大正9年5月刊
(昭和女子大学蔵)



心づくし
大正4年12月刊
(昭和女子大学蔵)

水上瀧太郎 (2)

八歳の日記 } 阿部章蔵造本
九歳の日記 }
(阿部優蔵氏蔵)

貝殻追放第四 昭和4年7月刊
" 第二 大正12年7月刊
(昭和女子大学蔵)

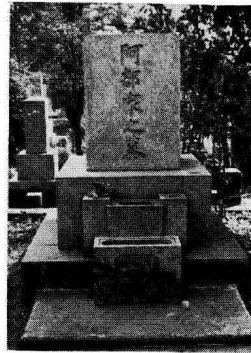


果樹 昭和21年11月刊
(昭和女子大学蔵)

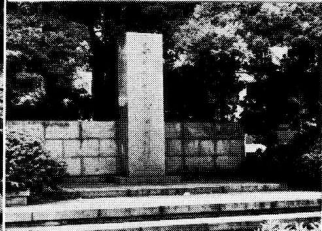
遺産 昭和11年12月刊
人生案内 昭和12年2月刊
(昭和女子大学蔵)



水上瀧太郎全集全十二巻
昭和16年3月~10月刊
(昭和女子大学蔵)



墓 (多磨霊園)



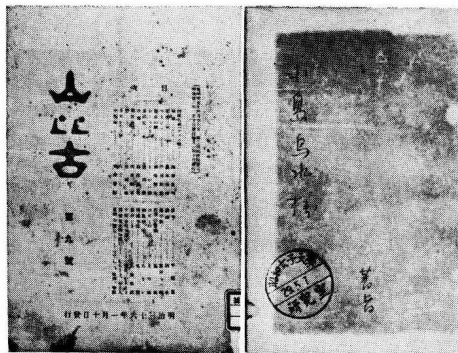
碑 (高井戸・明治生命ダイヤモンドテニスコート)

吉 江 喬 松 (1)

筆跡

山比古 明治36年1月刊

(昭和女子大学蔵)



肖像

砂丘 大正2年7月刊
緑雲 明治42年5月刊

(昭和女子大学蔵)



短篇ツルゲイネフ集

明治43年4月刊

(昭和女子大学蔵)

青空 大正元年10月刊

(昭和女子大学蔵)



高原 明治42年11月刊

(昭和女子大学蔵)

純一生活 大正4年4月刊
内扉 (昭和女子大学蔵)

吉 江 喬 松 (2)

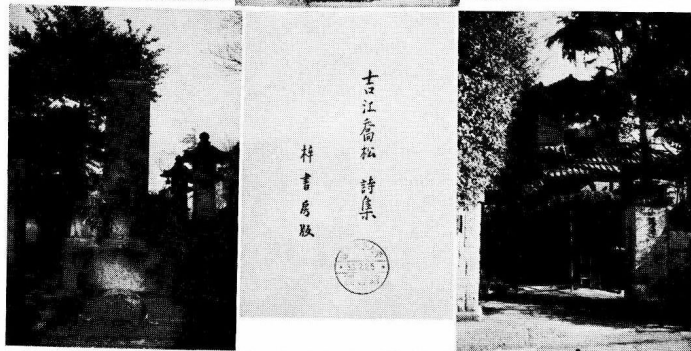
佛蘭西印象記
大正10年9月刊
(昭和女子大学蔵)

水の上 大正4年4月刊
(昭和女子大学蔵)



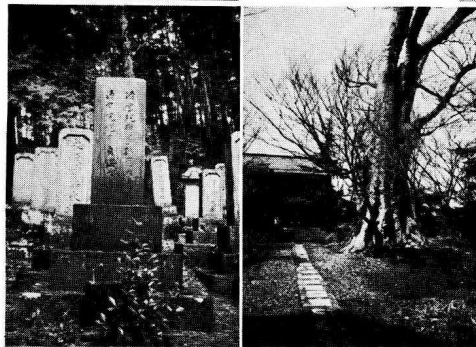
南欧の空 昭和4年1月刊
(昭和女子大学蔵)

(昭和女子大学蔵)



世田谷区宮坂の旧居

吉江喬松詩集 昭和5年10月刊
(昭和女子大学蔵)
墓 豪徳寺



塩尻市長畝の生家

墓 (塩尻市長畝)

馬場孤蝶 (1)

肖像

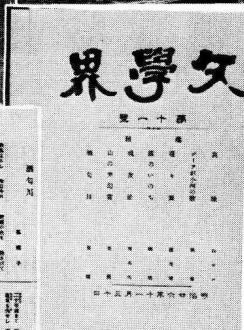


筆跡 (大津留晴子氏蔵)



「酒匂川」

と掲載誌「文学界」
明治26年11月
(昭和女子大学蔵)



國事探偵

明治43年9月刊
(昭和女子大学蔵)



春駒 明治39年3月刊
(昭和女子大学蔵)



花がたみ 明治38年2月刊
闘牛 大正8年9月刊
(昭和女子大学蔵)



連翹 明治38年5月刊
(昭和女子大学蔵)

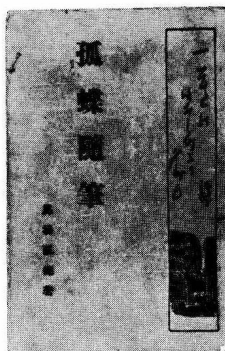


馬場孤蝶 (2)

明治文壇の人々 昭和23年6月刊
(昭和女子大学蔵)



紫煙 大正14年6月刊
(昭和女子大学蔵)



孤蝶隨筆 大正13年10月刊

(昭和女子大学蔵)

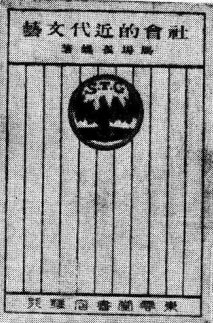


野客漫言 昭和8年9月刊
(昭和女子大学蔵)



社會の近代文藝 大正4年12月刊
鵲鵲藏 大正12年6月刊

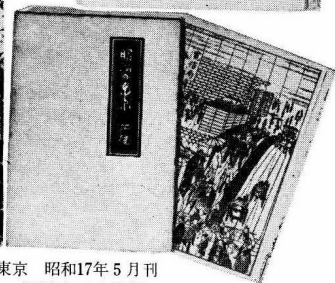
(昭和女子大学蔵)



近代文藝の解剖 大正3年9月刊
(昭和女子大学蔵)



墓 (左孤蝶, 右辰猪・谷中霊園)

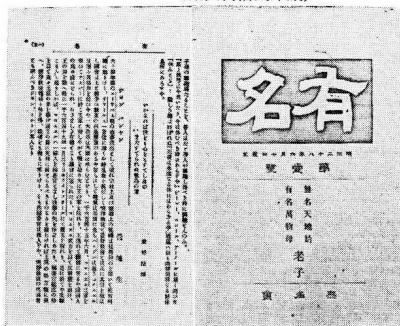


明治の東京 昭和17年5月刊
(昭和女子大学蔵)

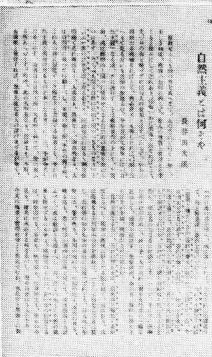
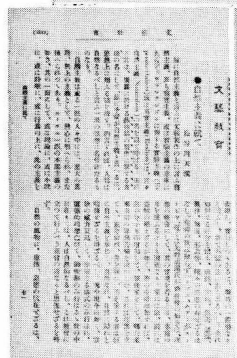
長谷川天溪 (1)

有名 明治28年6月

(東大明治文庫蔵)



肖像 (長谷川美貴子氏蔵)



文学訓 明治39年5月刊
自然主義とは何ぞや

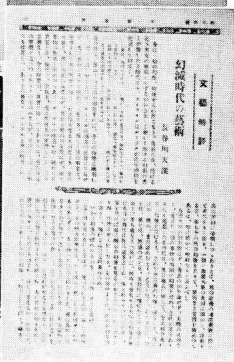
明星 明治35年9月
(昭和女子大学蔵)

自然主義に就て

早稲田学報 明治35年8月
(昭和女子大学蔵)



自然主義 明治41年7月刊
(昭和女子大学蔵)

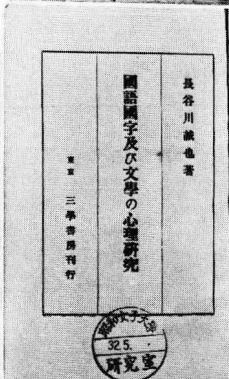
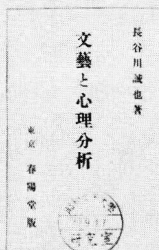
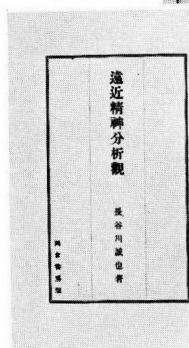


幻滅時代の藝術

太陽 明治39年10月
(昭和女子大学蔵)

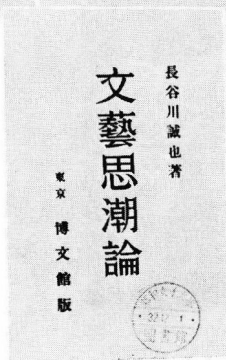
長谷川天溪 (2)

萬年筆 明治43年2月刊
倫敦の雜誌社巡り
文章世界 明治44年2月
(昭和女子大学蔵)



國語國字及び文學の心理研究
昭和16年2月刊 (昭和女子大学蔵)
文藝と心理分析 昭和5年9月刊

↑ 遠近精神分析觀 昭和11年9月刊
(昭和女子大学蔵)



文藝思潮論
昭和4年2月刊
(昭和女子大学蔵)

奥津城
(円覚寺内松嶺院)

目次

口 絵	近代文学研究室……(一三)
第四十六卷の成立	近代文学研究叢書編集室……(一六)
凡 例	近代文学研究室……(一九)
水上瀧太郎	近代文学研究室……(二九)
吉 江 喬 松	近代文学研究室……(三六)
馬 場 孤 蝶	近代文学研究室……(四二)
長谷川天溪	近代文学研究室……(四三)
近代文芸年表(46)	近代文学研究室……(四四)
PERSONALITY PROFILES	近代文学研究室……(四五)
卷末付記	近代文学研究叢書編集室……(四六)
読 後 感	諸 家……(四七)
索引	近代文学研究叢書編集室……(四八)

第四十六巻の成立

本巻は昭和期第二十一巻として、昭和十五年三月から昭和十五年九月までに歿した左記四名の研究調査を収めた。

水上瀧太郎は小説家、評論家、劇作家。本名阿部章蔵。明治二十年（一八八七）十二月六日、東京麻布（現港区）飯倉町で明治生命保険相互会社の創設者阿部泰蔵の四男として生まれた。芝区御田小学校時代は同級に小泉信三、上級に吉井勇がいた。慶応義塾普通部に入学の頃から鷗外、紅葉、緑雨、一葉、独歩、与謝野寛、晶子、鏡花等、当時の新しい文学を耽読し、わけでも小説は鏡花、短歌は与謝野夫妻に心酔した。しかし学科に対する好悪がはげしく、原級にとどまること二回に及んだ。明治四十年四月、大学部理財科予科に入学、心機一転、出寮と同時に野球部もやめ、かって鏡花によって開かれた文学への目を、文学部教授となった永井荷風の講義をうることにより一層ひろげられた。大学卒業後約五年間に及ぶ欧米遊学から帰国後は、父の会社明治生命の一社員となって勤人生活に入るが、文学者としての生活も確実に貫き、二足のわらじをはくそしりを受けながらも双方を立派に両立させた。初期は短歌から出発し、戯曲、小説、評論と幅広く勢力的な活動が続けた。主として「三田文学」を発表の場としたが、同時に事実上の「三田文学」育ての親としての功労者であった。

た。初期の感傷的でさえある優雅なロマンチズムは、代表作『大阪』『大阪の宿』に至ってシニカルな社会観照を加味し、平明で格調の高い文章と鋭い批評眼に裏打ちされた作風は、随筆、評論集『貝殻追放』に集結されている。昭和十五年（一九四〇）三月二十三日脳溢血のため、明治生命で講演直後たおれ、その夜おそく死去した。享年五十四であった。

吉江喬松は詩人、文芸評論家、フランス文学者。筆名孤雁。明治十二年（一八七九）九月七日、長野県東筑摩郡塩尻村（現塩尻市長畠）に旧家の長男として生まれた。母は別居、父は外泊がちの家では祖母くになが采配を振り、嫡孫の喬松は畑の耕作、山林の伐採、養蚕の手伝いに明け暮れる中で、ひまをみては大きな屋敷の一角にとじこもり、バイロンの「チャイルド・ハロルド」、ゲーテの「若きヴェルテルの悩み」、漢詩文など手当たり次第乱読した。明治三十四年一月上京、早稲田大学高等予科一期生として入学、大学部文学科では英文学を学んだ。卒業後は国木田独歩の近事画報社に入り「新古文林」の編集にたずさわった。「霜月」「武蔵野村」「潮来」などの小説の中に豊かな詩人性と自然傾倒の傾向が芽を出しはじめ、処女散文集『緑雲』、第一文集『高原』には浪漫的な自然詩人としての特色が出ている。大正四年四月、早稲田大学教授となり、翌五年十二月、フランス留学がかない、足かけ五年間海外で学んだ。帰国後は仏蘭西文学専攻の教授陣の充実をはかり自らもフランス文学史、フランス古典劇の講座を担当した。喬松の自然美への傾倒は『自然美論』（昭10・7）に結集されているが、中村星湖、平林初之輔らと農民文芸会を組織し、その上に山岳美論、海洋文学論の展開がみられる。

著作はフランス文学に関する小論文をまとめた『仏蘭西文学談叢』（昭15）他多数にのぼり、『吉江喬松全集』全八巻（昭16・3・18・7）に収められている。昭和十五年三月二十六日中耳炎のため死去、享年六十一であった。

馬場孤蝶は翻訳家、随筆家。本名勝弥。明治二年（一八六九）十一月八日、高知市金子橋に生まれた。祖父源馬は高知藩士であったが、父来八は大酒飲みがわざわいして登庸されず、孤蝶の生まれた頃は逼迫した生活の中にあった。馬場辰猪は実兄であり、若くして亡くなったが孤蝶は生涯この兄を敬慕し続けた。明治二十四年六月、明治学院を卒業。英語教師として各学校を転々した。三十年一月から雑誌『文学界』で同人として平田禿木、戸川秋骨、星野天知らと共に活躍し、『明星』発刊と同時に上田敏とともに顧問格として尊重された。このころは『白百合』『文芸界』『新声』『青年会』『新小説』などの諸誌に美文、詩、翻訳などを掲載し、『万朝報』をはじめ『秀才文壇』誌上で詩欄の選者をつとめた。ロマン主義者として活躍していた時代である。三十九年九月、慶応義塾大学文学部教授となり昭和五年三月退職まで、欧州文学を講じた。明治四十年秋には自宅で文学講話会をおこしたり、与謝野晶子らと、成美女学校の科外授業として行なっていた閨秀文学会を持った。りして子女の教養のための講座を開いた。聴講者には平塚明子、山川菊栄、岡本かの子らがいた。孤蝶は創作や詩も書いたが評論及び西洋文学、大陸文学の翻訳、紹介者として大きな功労があった。また樋口一葉とも親しく、大正時代の社会主義運動にも影響を与えた。著書に『孤蝶随筆』『明治文壇回顧』『明治文壇の人々』などがある。昭和十五年六月二十日、肝臓癌のため死去、享年七十であった。

長谷川天溪は評論家、英文学者。本名誠也。明治九年（一八七六）十一月二十六日、新潟県の柏崎市で生まれた。十歳で父に死別、明治二十三年単独上京し、商工中学、数学院、国民英学会を経て東京専門学校文学科に入学、三十年、卒業と同時に坪内逍遙の推薦で博文館に入社した。「太陽」の記者として活躍「セッサリー旅行」（明治30・10）をはじめ科学欄、人物紹介欄を執筆していた。「不自然は果して美か」「解決なき創作物」「批判の本領」などは、アメリカの哲学者ボーク・ケールスの影響を受けて文学より哲学、科学に興味が傾き、さらに高山樗牛の「美的生活」によって再び文学方面に目を向けはじめた頃の作品である。そして三十八年四月發表した「文学の試験的方面」では現実を正しく再現すべき文学において人間内部の心状を、その動きの変化を克明にとらえることが必要であり、それは試験することによって捉えるのであると主張している。しかしこうした彼の主張も二転三転し、結局自然主義論におちつくが、その論にも行き詰まり、明治四十三年六月から約二カ年間の英国留学を機に、評論の筆を絶った。帰国後は文壇から離れて編集その他の仕事に精力を傾け、同時に近代英文学の研究に力を入れ、早稲田大学で英文学を講じた。のち、精神分析にも興味を持ち、『文芸と心理分析』（昭和・5）、『遠近精神分析観』（昭和・2）等の著作がある。その他国語問題にも注目し、文部省臨時国語調査委員、国語協会機関紙「国語運動」編集委員などを歴任した。著書、翻訳書は前記の他多数のこしている。昭和十五年八月三十日胆嚢炎のため死去、享年六十四であった。